More Valuable Education

RIKKYO MOVE

立教大学 大学教育開発・支援センター　ニューズレター

contents

1 総長・センター長 挨拶
2 大学教育開発・支援センターについて
3 メンバー紹介
4 Education in Focus
5 大学こぼれ話し

1

2005年度、「現代GP」に採択された「理数教育連携を通じたCBLSプログラム」の活動風景

立教大学は、東京都豊島区との教育連携事業として、区立小中学校を対象に「理数教育連携」を行っています。この事業は、理学部学生が区内の児童・生徒に「サイエンスすることの楽しさ」が分かる理数教育を行うもので、CBLS (Community-Based Learning in Science Education) という名称で、理学部のカリキュラムに位置づけられています。

このプログラムは、本年度の文部科学省による「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代GP-4頁参照）に採択されました。

greeting

『MOVE』創刊によせて

総長　**押見輝男**

大学教育開発・支援センターが2004年10月1日に発足してから、1年余りがたちました。その日、本学の活動の両輪として教育と研究の発展をはかっていくという趣旨で、大学教育開発・支援センターとリサーチ・イニシアティブセンターの開所の式を合同でおこないました。ここから立教の新たな発展が展望できる、そんな大いなる希望をもって両センターの開所の式に臨みました。

期待のとおり、両センターは発足以来、活発な活動を展開し、全学で広く知られたものになってきました。この1年間、すでにいろいろな場面で両センターの活動に参加・協力いただいた方も多くおられることでしょう。

大学教育開発・支援センターの活動は多彩ですが、すべては、大学の教育現場がよりよいものになることをめざして展開されています。多彩な活動とは、形の上だけのことではありません。例えば講演の内容を見ても、この1年間にセンターは多様な観点から大学の教育の問題に取り組んできました。

多彩な活動を展開しているというのは、ひとつの決まった解答を、改革の名のもとに「上から」押しつけることはしないということでもあります。現在日本の多くの大学で教育の改革と改善がさけばれていますが、本学の大学教育開発・支援センターは、この目標は学生と直に接する教職員の自発性なくして十分に達成することができないという点を明確にして発足しました。

センターの名称自体、大学教育の現場で必要なものを「開発」するとともに、そうしたものを求める教職員の活動を「支援」するという役割を表現したものです。その意味で、大学教育開発・支援センターにとって、多様な発想や経験をもった教職員とのコミュニケーションはきわめて大切です。

発足1年を経て、今ニューズレター『MOVE』が発行されることになったということは、まことに適切で時宜を得たものと考えます。『MOVE』により、2年目以降のセンターの活動がいっそう実り豊かなものになることを期待し、創刊にあたってのあいさつといたします。

教育力の向上に資するセンターに

センター長　**檜枝光太郎**

本センターは発足後1年しか経過していませんが、立教大学の教育力の改善にいくつもの成果をあげることができたと自負しています。教職員皆様のご協力とご支援、ならびにセンターにかかわる皆さんの努力の賜物と感謝しております。

激しさを増しつつある大学間競争においては、教育力の向上が必須です。これまでは、学内ですでに行われているよい取り組みを発掘して、学内に発信し共有することを中心に行ってきました。その過程で、多くのすばらしい取り組みに出会い、改めて立教大学の教育に自信を深めました。しかし現状に満足することなく、今後は新しい教育力向上の取組について発信していきたと思います。

次のステップとして、いわゆるインスティチューショナル・リサーチ（大学の意思決定に役立つ調査研究と情報提供）の教学面をになう部署として、いっそうの発展を目指しますので、物心両面の更なるご支援をお願い申しあげます。

outline

私たちは、立教大学における教育の日常、現実を見つ
真の大学教育力を強化し、学生の学習力の向上を目指

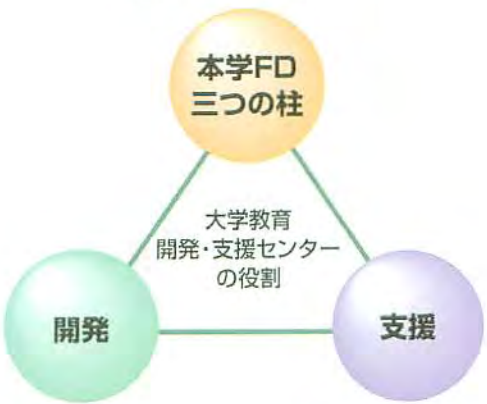
立教大学では、大学教育力の強化に向けたカリキュラム改革や授業改善の全学的な取り組みが始まっています。立教大学としての独自の問題意識にもとづいたイノベーションの芽生えです。

大学教育開発・支援センターは、立教大学全体の教育活動を支援する情報センターとしてスタートしました。

現代の日本では、教育を取り巻く環境が大きく変動し、大学の個性化が求められています。センターの役割は、学生の学習力の向上を目指して、立教大学らしい教育とは何かを考え、前進していくための様々な材料を提供していくことです。

「学生たちが立教大学に入学してよかったと感じ、意欲的に学習に取り組む活力のあるキャンパスを育むこと」。これが私たちの願いです。

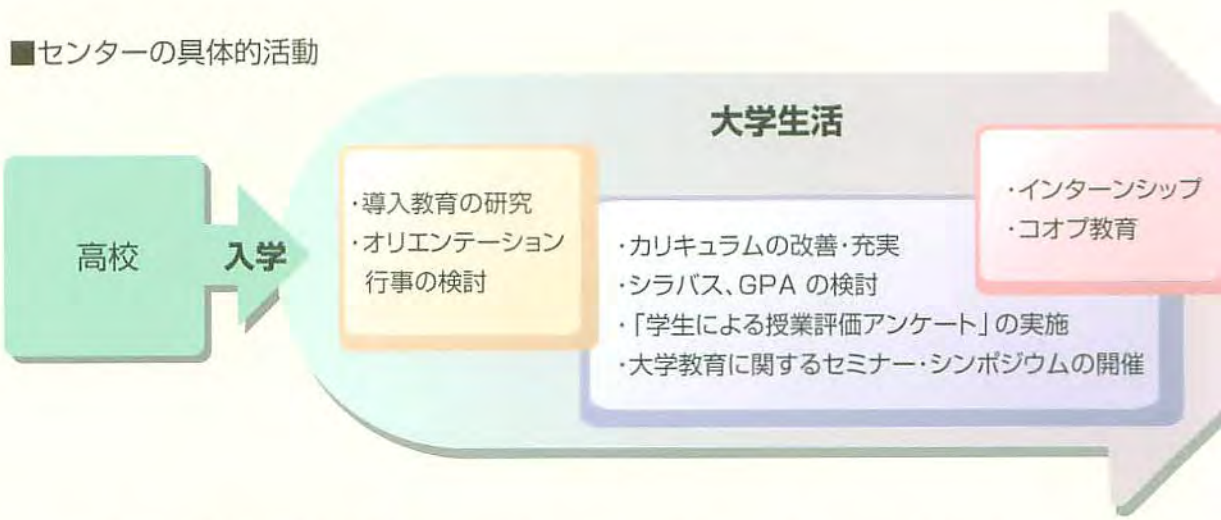
立教大学が求めている以下の3つを
総合的に達成する作業を支援します。
「教員の授業力の強化」
「カリキュラム編成の合理化」
「成績評価の厳正化」



新しい情報を集め、
新しい教育プログラムを進め、
新しい大学教育を創造します。

いかによい教育をするか、パワーの源泉は各教職員にあります。
そのパワーがより発揮されるよう、
学部・大学院が進めようとする教育改善の動きをお手伝いします。

■センターの具体的活動



よい大学とは、よりよい教育環境の実現に向けて不断の努力を行う大学です。教職員があたりまえと思っている日常の授業や行事は、学生にとって好ましい教育環境なのでしょうか。

センターは、まずそれらを検証することから始めました。入学してくる学生の多様化に対応した教育配慮がなされているか、多岐にわたるオリエンテーションは学生のリアリティにあわせてわかりやすく的確に行われているか。また、学生たちは個々の授業をどのように捉えているか。

その検証を通じて発見された課題は、全学的なプロジェクト活動を経て、たとえば「体系化された新入生オリエンテーション」という新しいプログラムの開発に結びつきました。

め直し、
指す、情報センターです。

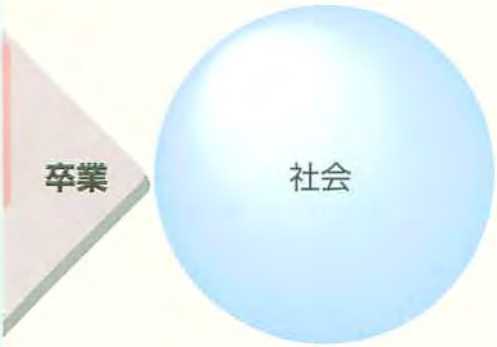
■ 教育改善のプロセス

Plan- Do- Check- Action。このサイクルの中から全学英知を結集した改善策が結晶し、教育内容のイノベーションがなされていきます。

私たち大学教育開発・支援センターは、

・現状を把握するための情報の収集と分析
・課題の発見と整理
・学内各所への情報の発信と共有

を図り、このサイクルを推進します。



センターメンバー紹介

センター長	檜枝　光太郎	（理学部教授・理学部長）
副センター長	大野　　久	（学校・社会教育講座教授）
センター員	小川　有美	（法学部教授）
	村上　和夫	（観光学部教授）
学術調査員	茂垣　まどか	
	野坂　尊子	
顧問	寺崎　昌男	（立教学院本部・総長室調査役）
事務局	今田　晶子	
	伊藤　直子	

（左から　野坂、茂垣、今田、檜枝、大野、伊藤）

学術調査員

現在、当センターには2名の学術調査員がおり、立教大学や日本国内、海外における教育実践や教育改善などの状況や動向を調査しています。授業に対する学生のニーズや、先生方が授業で行っている工夫、他大学の授業改善など、教育に関わる大学にとって有効な情報を幅広く収集し、分析しています。

また、理学研究科からのアンケートの質問票の作成や分析、教務部からのGPAに関わる調査など部局からの要請に応える調査・分析も行っています。

Education in Focus

「立教科目」が特色GPに採択されて

全カリ総合教育科目担当部会長　名和隆央

このたび「立教科目―建学の精神から学ぶ科目展開」が文部科学省の特色GPに採択されました。当事者としていくつかの点を述べさせていただきます。

■春休み返上の申請書作成

私はそもそも今年の申請はないだろうな、と思っていました。なぜなら、全カリはすでにこれまで2回、「組織運営」、「英語教育」で申請を行ない不採択になっていたからです。しかし3月の初旬に、やはり今年も全カリから「立教科目」で申請するという大学の方針が決まりました。申請の締め切りが4月5日と迫っており、十分な準備期間もありませんでした。それから1カ月間は全カリの事務局とリサーチ・イニシアティブセンターとの打ち合わせ、申請の文書づくりはたいへんで、まさに文字通りの「春休み返上」でした。申請にこぎつけた事務部局の努力に感謝しております。まず申請文書が明瞭であり、立教科目の独自性やカリキュラム上の役割を説得的に論じることができなければ、1次審査を突破することはできません。事務部局はその力量を十分に発揮したわけです。

■ヒアリングでのポイント

私は2次審査のヒアリングでプレゼンテーションを担当することになっており、立教科目の意義と役割をどのように説明するかに苦心しました。「立教科目」はキリスト教にもとづく建学の精神をそれ自体として教えるのではなく、現代社会の諸問題を建学の精神にもとづいて考え、理解し、行動へと誘う科目群であるととらえました。そして、そのような教育効果を立教大学が行なってきた「大学環境調査」「授業評価アンケート」にもとづいて実証的に示すことにしました。結果的に、このような説明の流れは成功したといえると思います。質疑応答では、①なぜ必修科目にしないのか、②履修者が減少しているではないか、③専任教員の担当率が低いのでは、④専門科目の学習に効果があるのか、などカリキュラムの本質に関わる問題が質されました。これらの点については、山本全カリ部長から適切な説明がなされました。

■さらなる充実を

ともかく、「立教科目」が特色GPで採択されたことは、全カリの目指している方向が教養教育のひとつのあり方として認められた、といってもいいと思います。しかし、補助金が支給されるこの4年間に、立教らしい、学生が立教生として誇りを持てるような、教養教育のさらなる充実が目指されなければなりません。

武蔵野新座キャンパス「ユリの木ホール」
（学生関係施設、2005年8月竣工）

「特色GP」と「現代GP」

「ジー・ピー」とは、グッド・プラクティス（Good Practice:「優れた取組」の意）の略語です。日本の高等教育の更なる活性化を促進することを目的とした文部科学省の事業であり、国公私立大学・短期大学などを問わず、大学改革、教育改善に資する取組を公募により選定し、財政支援を行うというものです。

「特色GP」（特色ある大学教育支援プログラム）は、2003年度から始まり、各大学の教育目的に沿った特色ある組織的な取組の中で、今日まで継続的に実施し、実績をあげている優れたものに対して支援を行います。選定された事例を広く社会に情報提供し、他大学の取組の参考になることを目的としています。

「現代GP」（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）は、2004年度から始まり、各種審議会による提言などから、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマが設定され、実績がなくても今後の計画性が明確で、成果が十分期待されるものを選定して支援するものです。

立教大学では、本年度「特色GP」に全学共通カリキュラムの「立教科目―建学の精神から学ぶ科目展開」、「現代GP」に理学部の「理数教育連携を通じたCBLSプログラム」が採択されました。

なお、この他「『魅力ある大学院教育』イニシアティブ」に異文化コミュニケーション研究科の「持続可能な未来へのリサーチワークショップ」が採択されました。

大学こぼれ話し 1

「立教」の由来

センター顧問　寺﨑昌男

立教大学の「立教」はどういう意味か。いつから名付けられたのか。何人かに聞かれたことがある。だが定説はまだないというのが正しいようである。

大学の名には①地名や国名を被せたもの（東京大学、関西大学、亜細亜大学など）②創立時期に由来するもの（明治大学、昭和大学など）③精神的意味を持たせたもの（聖心女子大学、上智大学など）があり、それぞれ地名型、時代型、意味志向型と言ってもいい。②③結合の慶應義塾大学や①②融合の大学（帝京平成大学）もある。ハーバードやスタンフォード、フンボルトのように創設者や創設精神を象徴する人名を使う例は日本にはなぜか少ない（聖路加看護大学など）。

「立教」という文字がついたのは1875（明治8）年頃で、意味志向型の③に入る。戦前から信じられてきた由来は、アメリカからの主教たちに邦人漢学教師だった古瀬清寧が漢籍を基礎に示唆したのではないか、というものである。漢籍は宋学のテキスト『小学』で、その中に「立教篇」という章があり、それをもとに示唆したという（『立教学院85年史』）。

一方、ウイリアムズ主教が参照したのは北京語祈祷書のなかの「将立教書祈祷文」であり、これに基づいて主教自身が、築地に開かれていた学校（一時セント・ポールズ・スクールとも言われた）の日本名を決めた、という説である。学院史資料センターの大江満氏が元・東北教区主教の田崎安男師からの示教をもとに紹介された説で、ウイリアムズ主教の語学力や学識、リーダーシップなどから考えれば、肯くことのできる説に思える（「『立教』の由来についての新説」『雑誌「立教」』188号）。

「立教」という言葉は事典によっては熟語の一つに数えられていて「教えを立てる、教えを設ける」ことと説かれ、出典は「漢書」の武帝紀だという（広漢和辞典）。さらに「立」という語は「すべてものの端緒をなし、創建し、秩序を定め、基調を確立すること」だという（白川静『字通』）。

ところで、ウイリアムズ命名説に伴っている判断の一つは、立教学校は当初、キリスト教教職者の養成を主眼として考えられていた、という見方である。これが正しいとすれば、その立教学校はいつから日本国民対象の高等教育機関をめざすようになったのか？そして1918年に旧制の「大学」になったのち、どのようにして独自の大学に発展したのか？校名の吟味は、好奇心や想像力を掻き立ててくれる。

1914（大正3）年に描かれた池袋キャンパスの予想鳥瞰図

編集後記

この刊行物の名称「MOVE」は、More Valuable Educationを略したものです。moveという単語それ自体には移動する、あるいは運動という意味があるので、立教大学がより価値のある教育を目指すという決意と、そのために運動、すなわち不断の努力を続けるという意思を込め「MOVE」と名付けました。

第2号はさくらの咲く新学期にお目にかかる予定です。（AI）

「MOVE　第1号」
立教大学大学教育開発・支援センター　ニューズレター
2005年12月20日発行
発行　立教大学大学教育開発・支援センター
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4623　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe/

自由の体感
共創のステージへ
RIKKYO UNIVERSITY